

# イスラム教徒はどのような隣人なのか

三原一郎  
(神戸大学保健学研究科)

## 1. はじめに

小論は、筆者が K 市にあるモスクや、それに関わる人々、イスラム教徒のインドネシア人との関係から得られたフィールドワークを基に書かれたものである。

特に、これを書く動機となったのは、日本人社会との関係において、イスラム教徒の文化・習慣が、あまりにも理解されていないと痛感したからである。

インドネシアに関する研究を始めるまでも、亡父がインドネシア人との関わりがあり、大阪中之島の旧フェスティバルホールで、インドネシアに関わる催し物に参加したことを筆者は覚えているが、その時は小学生であった。

その時は、イスラム教を意識することはなかったが、インドネシア人 EPA 看護師の研究を始めて以来、インドネシアにおいてはイスラム教徒が多数を占めており、彼・彼女らの宗教に関わる行動を抜きにして、インドネシア人 EPA 看護師の研究は難しいと感じたからである。

ところで、多くの日本人は、宗教に関わる行動に関して、無節操とも言えるぐらい寛容である。例えば、神道と仏教は神仏習合の考えもあり、一般的には、七五三や初詣は、本来神道の宗教に関わる行動であるはずなのに、仏教徒もなんの抵抗も無く受け入れるし、クリスマスはキリスト教の宗教に関わる行動であるのに、神道や仏教を問わず祝っている。

筆者の知る限りでは、宗教上の対立が紛争の元になる事はいとまがない。例えば、エルサレムにおいては、イスラム教・キリスト教・ユダヤ教の聖地が 1 箇所密集して存在するため、古くから紛争の元であった。

日本において、神道と仏教の対立があまりないのは望ましい事ではあるが、一般的な日本人にとっての宗教観とは異なり、厳格な戒律を伴うイスラム教のような宗教であると、その教義に従う理由を理解する事が相当難しくなる。例えば、女性イスラム教徒のインドネシア人 EPA 看護師候補者に対して、髪を覆うヒジャブ (内藤, 2016; 常見, 2018b) (インドネシア語ではジルバブ) を取るように指示している病院もあると聞く (私信)。イスラム教徒の女性インドネシア人看護師は、戒律を守れない事について、どのように感じているのだろうか? と行った事などを、筆者のフィールドワークを元に記したものである。

ここでは、イスラム教徒の方々には、筆者の戒律への理解が乏しく、失礼した事など、筆者の失敗談なども盛り込みつつ書いた。イスラム理解の一助となれば幸いです。

る。

## 2. 男女を分ける習慣

イスラム圏では、家族以外の男女が外で親しくするのは避ける傾向がある。

その事を知らずに、筆者と一緒に妻がK市のモスクに行った際、妻が女性用の2階の礼拝場所から1階の男性用礼拝場所に降りてきてしまった。その時、筆者と一緒に喋っていたR氏は困った顔をしていた。

その時はおかしいなあ？と思っていたが、日を改めてR氏にその話しをした。R氏が言うには、イマーム<sup>(1)</sup>（信徒の代表）や他の信徒から、私がR氏と親しいのを知っているが、だからといって女性が1階の男性用の礼拝場所にくるのは、他の礼拝に来ている男性にとって、かなり戸惑う（恥ずかしい）事らしい。慎み深いムスリマ（女性イスラム教徒）は、決してそのようなことをしない。

その事があってから、異教徒である妻を連れて行くときは、2階の礼拝場所から動かないようにしてもらっている。

次は、女性の礼拝場所での出来事を妻から聞いた。

モスクに行った日、2階の礼拝場所にいると、3人の外国人が入ってきた。

彼女らの自己紹介では、1人がモロッコ人の留学生だった。妻は、間近でアフリカ系の人に初めて接したので、とても色が黒い人だったと言っていた。

残りの2人は、マレーシアからの観光客であるとの事だった。マレーシアからの観光客であっても、気軽に立ち寄ることが出来るのがモスクである。

そこは、国という、人によって作られた境界とは関係なく、唯一絶対の神アッラーに従う、つまり、「イスラムする」ものたちが、ともに礼拝する場所である。

妻の話では、4人で女子会のようになって、一緒に写真を撮ったり、インターネット翻訳サービスのGoogle翻訳を使って、話をしたりしたと言っていた。とても楽しい時間だったとのことである。

妻が、1階の男性用の礼拝場所に入ってきたときは、男性は女性に対して戸惑うが、同性同士ならば、ムスリマは、全く戸惑う事はなかったと言う。

いわゆる西欧の規範から見れば、イスラムは、女性に対して抑圧的であるとか、権利が守られていない、との見解もあるが、男女を分ける文化的背景を持つ宗教が、イスラムであると考えられる。

他にも、筆者が男女共用の出入口で、日本に留学経験のある、男性のインドネシア人イスラム教徒のI氏を待っていたら、イマームがやってきて、他の場所へ移動してもらえませんか？と言う。

イマームによると、女性が恥ずかしがるから、そこにはいけないという事であった。イスラム教徒においては、前述の通り、男女を別々にする、悪い意味ではなく、

別々にするという文化の元に、イスラムが成立していると捉えるべきである。

但し、小さい子供は例外である。男性用の礼拝場所に、小さい子供男女一人ずつが、お父さんに連れられて礼拝に来ていた。

兄は礼拝の方法をある程度知っているようだったが、妹の方はまだそこまで知らないようで、小さな子供らしく、天真爛漫に、モスクのフロアを走り回っていたが、誰もそれをとがめたりしない様子であった。イスラムは、とても子供・家族を大切にするとする。EPA 看護師候補者の家族が、家族がインドネシアと日本に分かれて住まざるを得ないというのは、イスラムの規範から考えると、耐えるのが難しいのかもしれない。西欧の規範であったとしても、離れた家族を思うのは、自然なことではないだろうか。

また、男女を分けるという習慣から、第三者が夫婦間に立ち入るような話をしてはいけない、という暗黙のルールがある。

筆者がよく知っている、S 氏という日本に留学経験のある、女性イスラム教徒のご夫妻と料理店で食事をしていたときである。

冗談で「S さんは、いつも変わらず若々しいですね」という主旨のことを言ったら、S 氏は照れて「そんなことはないよ」と言っていた。ところが、ご主人がとても難しそうな顔をなさったので、これは何かマズいことを言ってしまったのだな、と感じた。

最近になって、第三者の男性がイスラム教徒の女性に対して、容姿等について触れてはいけないというのがわかった。つまり、そういうことに言及すること自体、夫が第三者の男性に対して嫉妬を引き起こす元になるので、戒められている（片倉ほか, 2002）という事である。

つまり、慎み深いヒジャブ（女性イスラム教徒の服装）で装っている女性は、夫にだけ妻の全てを見せても良いとされている。

例えば、女性用の下着がイスラム圏でも売られているが、夫にだけ見てもらうための下着を買うという（内藤, 2016; 常見, 2018a）。

### 3. ウドゥ（小浄）

次に礼拝に望む前に行う、ウドゥ（小浄）の手順について写真と共に述べる。

細かく手順が決まっており、それに従って行う。

『清潔は信仰の半ばである』と、み使いも言っていますが、アッラーの前に立つにあたっては、心身ともに清浄にして、邪念を退けねばなりません（Islamic Center Japan, 2019）。

そこで礼拝にさきだって水場へ行き、身体の特定の部分を定められた順序で浄める。水は、洗面器を使わず、蛇口から流れ出る水を右手のひらに受けて用いる（一度使用した水をもう一度使用しない）。これをウドゥ（小浄）と呼ぶ。

## 手順

- ①ニーヤ（意思表示）として「不浄を清めるためにウドゥをします」と唱える。
- ②バスマラ（仁慈あまねく慈悲深き、アッラーのみ名によって）を唱える。
- ③両手を手首まで三度洗う。



- ④右手に水を受け三度口をすすぐ
- ⑤右手に水を受け三度鼻孔に吸い込み、すすぐ。



- ⑥顔を額の髪の毛の生えざわからあごまで、また両耳のところまで三度洗う。



- ⑦右腕次いで左腕を、肘のところまで三度洗う。



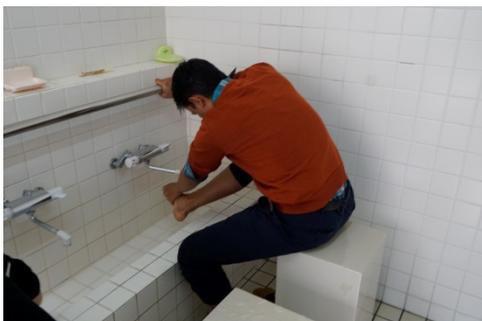
⑧－１ぬれた両手のひらで頭を前から後になでおろす。



⑧－２ぬれた両手のひらで頭を前から後になでおろす。(続き)



⑨－１右足をくるぶしまで水を注ぎながら三度、指の間までよく洗う。



⑨－２左足をくるぶしまで水を注ぎながら三度、指の間までよく洗う。



これはK市のモスクの水場で、イスラム教徒が実際にウドゥをしているところを撮影したものである。

ウドゥについては、余談がある。筆者の所属していた研究科には、イスラム教徒の学生が少なからずいたが、学校としてはウドゥの水場の用意がない。そのため、彼らはトイレの洗面台でウドゥを終えた後、濡れた体を拭くのにトイレットペーパーを使う。それが流されると排水管が詰まるので、その防止に金網が排水溝に被せられていた。

礼拝の前に行うウドゥのできる水場や礼拝場所の確保は、イスラム教徒にとっては、なくてはならないものであり、今後施設の充実が求められるのではないかと考えられる。

#### 4. イスラム教徒と日本の温泉——同性でもはだかに困惑

日本は火山が多い関係もあり、温泉地が多い。また、古くから公衆浴場が発達してきたためか、古くは混浴であったらしいが、現在でも男女別の混浴風呂が、温泉地でも一般的である。ところが、イスラム教徒のインドネシア人とは、認識が違うようである。

筆者が、日本には温泉が沢山あるから、行かないか？と前出のI氏を誘っても、また今度など、あまり良い返事は帰ってこない。

それはなぜかと調べて見たら、イスラムの教えから、同性同士であっても、はだかをお互いにさらすのはいけない（特に性器は、とても恥ずかしい）事であるという、ことがわかった。そのため、いわゆる温泉の大浴場に入るのをためらう、という事である。

しかし、トルコでは国民の大半がイスラム教徒であるが、ハンマームという銭湯がある。日にちによって男女が分かれているので、どちらも利用できる。但し湯船はなく、脱衣するときも、シーツのような薄い布を巻き、体を洗い場でもはだかをさらすことのないように、同じ布で体を巻いたまま体を洗うのである。それがイスラムの習慣であるため、日本の同性混浴風呂とは馴染まない。（内藤, 2016）

また、インドネシア人特有の事情として、イスラム教徒以外でもバスタブに入る習慣がなく、シャワーのみで済ませるといった事もある。

そのような彼に、筆者は入浴剤をお土産に渡してしまった。礼儀正しい人なので受け取ってくれたが、取り扱いに困ったのではないかと、今から思えば反省することしきりである。

また、彼がサイクリング旅行に行った際、温泉に入れるホステルを予約したが、サイクリングが予定よりも早く進み、その宿をキャンセルした。

そのままサイクリングは進み、終点でシャワーを浴びたと言っていた。

そのようなことを考えても、やはりインドネシア人のイスラム教徒には、同性同士で入る大浴場と言うのは、抵抗があるものであることが追認された。

もし、どうしても温泉を楽しんでもらうには、いわゆる家族風呂 (Private bath) を用意すると、気兼ねなく入ってもらえるだろう。

## 5. ハラルミール

イスラム教徒と食事を共にする際、一番気をつける必要があるのはハラルミールである。

豚肉由来の一切のもの、アルコールが製造途中で入るものは食べてはならないし、豚以外の家畜であっても、アッラーの名の元で所定の手順で屠られたもの以外は、食べてはならない。

西歐的な価値観では、物事の善悪を自分の頭で考えようとするがため、イスラム教徒の、ハラルやハラームの概念を理解することが難しいように感じる。イスラム教徒にとって、ハラルの概念は、神が下した命令であり、それに従うことがイスラムの戒律であるため、信徒自身の判断が入り込む余地は全く無いのである。

つまり、イスラム教徒に課せられた義務であり、信徒以外のものがそれを大変だとかいう問題ではなく、イスラム教はそういう宗教だから、戒律を守ることによって、神から守られているというふうに解するべきものである。戒律を守るとは、「最後の審判の日、現世における信仰や所業を秤にかけられたとき、それが多いものは天国行けるが、そうで無いものは地獄に行く事になるので、怖れているのである。」(片倉ほか, 2002)

筆者の調査のため、インタビューを受けてくれた A 氏ご夫妻と、和食の店でウナギを食べて頂いた事があった。ウナギはハラルだから大丈夫だろうという認識であったが、今考えると、醤油・みりんはアルコールを含むものであり、食べてはいけないものであった。今から考えると、A 氏の奥様が、困った顔をなさったのを見落としていた。大変申し訳ないことをしたと、こころよりお詫びを申し上げたい。

I 氏は、インテリジェンスも高く、礼儀正しい人だが、戒律を守ることにってはか

なり厳格で、日本において食事を摂るとき、普段はハラールのカップ麺を食べている。それ以外のものは、何が入っているかわからないので、食べることができないのである。

イスラム教徒の観光客に向けた、ステーキレストランでは、主として富裕層向けに、ハラールのステーキを提供している（元祖 鉄板焼ステーキ みその, 2019）。

では、I氏と筆者と一緒に食事をしたとき、ハラールミールにどのように対応したか述べる。

2019年にI氏が来日した際、最初の食事はファミリーレストランであった。M先生も同席だったが、先生がハラールである可能性が高いものをメニューの中から選んで勧めていた。

次に会ったときは、K市のモスクであった。その近くには、イスラム教徒が食事に来るの見込んで、ハラールレストランがあり、そこで食事をした。そこはハラールミールしか提供していないので、ムスリムにとっては、安心して食事が出来る場所である。

3回目の機会は、トルコ料理店に行った。トルコ料理は世界三大料理のうちの一つであり、オスマン帝国の時代の繁栄を背景にした宮廷料理であるといわれる。また、現在のトルコは90%以上の国民がイスラム教徒であり、ハラールミールとの相性が良い。但し、トルコは、イスラム教と政治の分離を行った国家（世俗国家）となっているため、礼拝や断食などのイスラムの戒律を守らないことも、トルコ国内法では許容されている。また、ハラールとされない（ハラーム）のもの代表とも言える、ビールやワインなども、トルコ国内で生産・販売されており、それらを飲食しても戒律を破ったことを咎められて、処罰を受けることはない。

最後は、帰国時である。昼のフライトであったため、早朝にI氏の泊まるホテルに出向くとまもなくI氏が降りてきた。I氏に朝食は済んだか？と聞くと済んだという（それは彼の気遣いだった）。空港について、チェックインまで時間があつたため、改めて食事はどうするか？ここにはハラールレストランがあるよといったところ、行くという。やはりお腹が空いていたようであった。

イスラム教徒が安心して食事を摂れるようにすることは、イスラム教徒が世界人口の1/4に迫ろうとしているとの事もあり、今後求められることである。

## 6. モスクの内部



上の写真は、モスクの内部である。大きなシャンデリア吊り下げられており、床は絨毯引き、装飾は偶像崇拝を禁止するイスラムの教えに則り、幾何学模様やコーランの一節などをアラビア書道（カリグラフィ）で書いたりする。また、金を多用するなどの特徴がある。

中央のアーチ状で窪んでいるところ「ミフラーブ」と呼ぶ。ここは、イスラム教徒は礼拝の際にはメッカの方向に向かって礼拝するが、モスクのカーバ神殿に向いた方向「キブラ」<sup>(2)</sup>に設けられた、モスクには必ずある施設である。このモスクでも、ミフラーブは金で装飾されおり、豪華な作りとなっている。

ミフラーブの右隣にある、階段状になっており、6段ほど高くなっているのが「ミンバル」と呼ばれる説教台である。ここで、金曜日に「フトバ」と呼ばれる説教をイマームが行う。男性のイスラム教徒にとって特に重要な礼拝であり、この礼拝を行うことは、男性信徒（ムスリム）にとって義務であるとされている。金曜日の礼拝では、沢山のイスラム教徒がこのモスクに集まり、ミンバル上で説教がなされる。R氏によると、金曜日の礼拝には、平日の金曜日で150人から200人が参集するという、さらに、金曜日が日本の祝日に当たる場合、人数が増えて、350人から400人が礼拝に訪れるとのことであった。金曜日以外の平日月曜日の昼礼拝参加者は5人であった事と比べると、金曜日の礼拝の参加者がいかに多いかわかるであろう。また、10月頃の昼の礼拝時間（Dhuhr・ドホル）は昼の12時半であるが、金曜日の礼拝（Jumma・ジュマ）は遠方から礼拝に訪れる信徒がいるのもあって、1時10分になされる。

しかし、残念ながら筆者は、金曜日の礼拝には、イスラム教徒ではないので、本心は陪席したいが遠慮している。金曜日の礼拝はイスラム教徒のためのものだからである。東京ジャーミイのwebサイトには、動画で金曜日の礼拝の説教（フトバ（フトバ））が公開されている（東京ジャーミイ・トルコ文化センター, 2019）。

ミンバルの左隣でミフラーブの正面に敷いてある絨毯の位置が、礼拝でイマームの礼拝位置である。

例えば、キリスト教（プロテスタント）であれば、イマームにあたるのは牧師である。牧師は神学校（大学の神学部等）を経て牧師に就任する。

イマームと牧師の違いは、両者とも信徒を導くだけの知識等を持つが、前者が模範的な行いをする信徒の代表をもってイマームとするのに対して、後者は職業として教会に属する形で、信徒と共に礼拝や説教などの行為を先導していく点<sup>(3)</sup>で異なる。

アザーンによる、礼拝時間の知らせをきっかけとして、徐々に信徒が集まり始める。集まってきた者たちは、見知った者、見知らぬ者にも握手を求め挨拶を交わす。アザーンから礼拝時間まで15分ぐらいの時間がある。それまでは比較的自由に、瞑想する者、祈る者、コーランを誦する者、様々である。

時間が来るとイマームが入場する。信徒は絨毯の線上に一列に並び、礼拝が始まる。

アザーンにせよ礼拝にせよ、そこに満ちる音は朗々と響く美声である。キリスト教がオルガンと賛美歌を祈りの中に持つように、イスラムは声に祈りを込める。

## 7. R氏

R氏は、K市のモスクの長老格の人物である。彼は立派な白髪交じりのあごひげを蓄え、いつも柔和な笑顔で筆者に接してくれる。

筆者がアザーンを聞いたあと待っていると、R氏がやってきて、「よく来てください

ました」と言って、歓迎してくれる。

その後、昼の礼拝のため、それぞれ集まってきた信徒が、コーランの読誦などを捧げ始める。

R 氏の語り口は穏やかだが、信仰のことになると、他の信徒の模範になるようなムスリムとしての行動を実践する事が日常となっている。

他の宗教の感覚では、神により近い人とでも言おうか。R 氏に、筆者が感じる、彼の信仰のありようを、「神々しい」と例えたところ「その例えは違っているね」と言われたのを思い出す。

イスラムは預言者ムハンマドを通じて、人類に託された最後の啓示であり、最も完璧な宗教である（小杉ほか,2018）。その教えに忠実にあろうとしているのが R 氏なのである。だからこそ、神ならぬ身であることを強く自覚する R 氏は、「神々しい」という言葉は適当でないと考えたのだろう。

## 8. イード・アル・フィトル

イード・アル・フィトルはラマダン（ヒジュラ歴の 9 月）明けのイスラム教の祝日である。

イスラム教徒は、ヒジュラ歴の 1 ヶ月間の断食明けを盛大に祝う。新月の出現をイスラム教徒は待ちわび、新月が観察されたらヒジュラ歴の 10 月（シャウワール）に入り、その日がイード・アル・フィトルとなり盛大に 3 日間の祝いを行う。

R 氏に祝いの内容を聞くとは次の通りであった。まず、甘いもの沢山作る。パキスタン、アラビアにおいては、近くに住んでいる親戚が来て、3 日間のイード・アル・フィトルの間、盛大にお祝いする。

例えば、マレーシアにおいては、家を開放して、1 ヶ月、無料で食べさせる、と聞いているとのことであった。

他にも、インドネシア政府公館がイード・アル・フィトルを祝い、同国民 1,000 人以上が集まるような祝賀行事を行うとのことであった。

## 9. おわりに

ここでは、イスラムの文化・習慣などについて、筆者が実際にイスラム教徒と交流し、感じたことを中心に述べてきた。

イスラム教は、既に世界の至る所に信徒がいる、世界的な宗教となっており、ここで述べたものは、筆者の関係したフィールドに依存するものである事をお含み置き頂ければ幸いである。

筆者がインドネシア人 EPA 看護師の研究を始めるまでのイスラム教に関する知識

は、豚肉が食べられない・断食があるなどであった。

ニュースで、イスラム教徒が断食中に、二国間の協議にあたる際、閣僚や外交官が両国揃って座ったテーブルの上には、水の入ったペットボトルが出されていた。ところが、断食中の国の代表者たちは、それに全く手を付けることなく、唾すら飲み込まないと聞き、その戒律の厳しさに驚いたのを覚えている。

それと比べると日本は、宗教的にかなり寛容であるように見受ける。

神仏習合に始まり、キリスト教の祝日も取り込んで祝うのは、国民性によるのだろうか。キリスト教文化を中心とした、西欧化だけが国際化ではないと筆者は考えるが、イスラム教徒がマイノリティである時だけならば、寛容になれるのかもしれない。

今後外国人が増えても、不寛容にならないためには、日本人と外国人との文化の相互理解がすすむ必要があるだろう。

#### <注>

- (1) イマームは、モスクにおけるイスラム教徒の代表である。イスラムの教えにも詳しく、礼拝においては信徒を代表して礼拝を行う。キリスト教（カトリック）の司教は、イエスの十二使徒の後継者として、任された教区全ての教会活動に責任を負うという位置づけがある。神父（司祭）は司教の協力者で、各地の教会で主として宣教活動や信徒の世話をする（カトリック中央協議会,2019）。そのため、イマームの位置づけと異なる。
- (2) カーバ神殿の方向のこと。
- (3) プロテスタントの牧師は、キリスト教の伝道師という位置づけであり、カトリックの司教・神父（司祭）が妻帯できないのに対して、牧師は妻帯できる。そういう意味では、イマームと牧師は相似通うところもある。

#### <付記>

ウドゥの写真は、写された人の掲載許可を得ている。モスク内部の写真は、モスク関係者の掲載許可を得ている。

#### <参考文献>

片倉もとこ

1991 『イスラームの日常世界』岩波新書。

2008 『イスラームの世界観「移動文化」を考える』岩波現代文庫。

—— (編)

2002 『イスラーム世界事典』明石書店。

加藤 剛 (編)

2010 『もっと知ろう！！わたしたちの隣人——ニューカマー外国人と日本社会』世界思想社。

小杉泰

1994 『イスラームとは何か——その宗教・社会・文化』講談社現代新書。

- ・黒田賢治・二ツ山達朗（編）  
 2018 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』ナカニシヤ出版。  
 桜井恵子（編）  
 2015 『イスラーム圏で働く——暮らしとビジネスのヒント』岩波新書。  
 内藤正典  
 2016 『となりのイスラム』ミシマ社。  
 ——・中田考  
 2019 『イスラムが効く！』ミシマ社。

<インターネット資料>

Islamic Center Japan

- 2019 「サラート（礼拝）」(<https://www.islamcenter.or.jp/about-islam/prayer/>)（確認  
 2021/8/13）

カトリック中央協議会

- 2019 「神父と司教の違いは何ですか？」  
 (<https://www.cbcj.catholic.jp/faq/priestbishop/>)（確認 2021/8/13）

元祖 鉄板焼ステーキ みその

- 2019 「元祖 鉄板焼ステーキ みその」(<https://misono.org/halal/>)（確認 2021/8/13）

常見藤代

- 2018a 「イスラム女性が黒いアバヤの下に着ているものは？」『イスラム世界を知るメディア』(<https://www.f-tsunemi.com/blog/realislam/30407/>)（確認  
 2021/8/13）

- 2018b 「『女性は宝石』イスラム教の女性が髪や肌を隠す理由」『イスラム世界を知るメディア』(<https://www.f-tsunemi.com/blog/realislam/25530/>)（確認  
 2021/8/13）

東京ジャーミー・ディヤナーナト トルコ文化センター

- 2019 東京ジャーミー 金曜礼拝のホトバ 「感謝するしもべになるために」（日本語）(<https://tokyocamii.org/ja/khutba/1280/>)（確認 2021/9/10）  
 2019 TOKYO CAMII CUMA HUTBESİ “ŞÜKREDEDEN BİR KUL OLABİLMEK“（トルコ語）(<https://tokyocamii.org/tr/khutba/1285/>)（確認 2021/9/10）